

「文字・語彙」習得のための問題作成をめざして — 経営学部で学ぶ専門用語を中心に —

尚 真貴子
新垣 公弥子

1. はじめに

「日本語能力試験」は、以下に示すように「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」に分割して試験が実施される。本稿では、その中の「文字・語彙」に焦点を絞り報告する。まず、留学生が日本の大学で学ぶにあたっては、主に次のような試験に臨む必要がある。試験の概況をまとめて示すと以下のようになる。

各テストの概況

試験名	試験内容	配点	認定基準または試験概要
日本留学 試験	聴解・聴読解・読解100分 記述20分	400点 60点	外国人留学生として日本の大学などに入学を希望するものについて、勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）の評価を行うための試験である。
日本語能力 試験 1 級	文字・語彙45分 聴解45分 読解・文法90分	100点 100点 200点	高度の文法・漢字（2,000字程度）・語彙（10,000語程度）を習得し、社会生活をする上で必要な、総合的な日本語能力（日本語を900時間程度学習したレベル）である。
J.TEST A-Dレベル	聴解45分 I 描写問題 II 応答問題 III 会話問題 IV 説明問題 読解・記述問題80分 V 漢字問題 VI 文法問題 VII 読解総合問題 VIII 記述問題	500点 500点	外国人の日本語能力を測定する試験である。特A級～F級の9段階にレベルが分かれており、930点以上は、特A級である。特A級は、様々な分野、場面において高度なコミュニケーション能力がある（高度な日本語の通訳ができる）レベルである。

BJT 旧JETRO	JLRT聴読解テスト 第1部 聴解 第2部 聴読解 第3部 読解	530点	J5～J1+までの6段階のレベルが設定されており、J1+になると、どのようなビジネス場面でも日本語による十分なコミュニケーション能力がある、とみなしてよいレベル。
	JOCTオーラルコミュニケーションテスト	800点	

まず「日本語能力試験」が1984年に、日本の大学で学ぶ留学生のための日本語到達度を測る試験として開始された。長い間、本試験での1級、2級の合格が留学、あるいは大学入学の基準とされていたが、全体として文語的な表現が出題される傾向にあり、実際の大学生活で必要な日本語とは乖離していることが教育の場で指摘され続けてきた。その結果2002年になり、日本留学試験が導入された。これはキャンパス言葉に重きを置いた点で、より大学生の実態に近いといえる。しかしながら、キャンパス言葉や口語を重視した結果、入学後の専門書での勉強には対応していないという面が指摘され始めてきた。

上記にあげたテストを段階的に使用しながら、日本語の熟達度を高めていくことをここでは提案したい。例えば大学入学前には「留学生試験」と「日本語能力試験」の学習を重視し、大学在学中には「日本語能力試験」を取得していない者には取得を促し、平行して「J.TEST」についても取得を勧める。このことで、おおよそ大学生活で必要とされる基本的な日本語は取得できるものと考えられる。その後は学生の希望に応じて、外資系や日本企業での就職を希望するものには「BJT: Business Japanese Proficiency Test (旧JETRO)」に挑戦することを勧めるといった段階と各試験の案内を充分に行う努力が教師側にも求められるのではないかと考える。

2005年度のテスト受験実績としては、11人全員が2005年12月に「J.TEST」を受験した。また「日本語能力試験1級」を取得していない学生7人全員が当該試験を受験した。さらに「日本語能力試験1級」をすでに取得している学生のうち、2人が「BJT (旧JETRO)」を受験し、1人が合格した。

本学の日本語の履修状況については後述するが、このような1年生の全国的な試験への取り組みは、上級生、大学院生の受験意識にも影響があり、申し込みに関する情報提供を要望する動きが見られるようになってきた。

1.1 「日本語能力試験1級合格」への試み

学部留学生の多くが、本試験での1級合格を目標に努力を続けてきた、あるいは続けているはずである。筆者らは2002年度から4年間に渡り、日本語能力試験にお

いて1級を取得していない学生に対し、その対策講座を開講し、その補助を試みてきた。それなりに成果はあげられたのではないかと考えている。2002年度、2003年度には、沖縄国際大学においてのみの対策講座であったが、2004年度からは、同時に神奈川大学経営学部でも対策講座を導入している。受講者の学習歴や所属学部においては一様ではないが、本学部の留学生について以下に記す。

2005年度本学経営学部入学の留学生は、9人の中国語母語話者、1人のポルトガル語母語話者（ブラジル出身）、1人のスペイン語母語話者（ペルー出身）である。日本語の学習期間は平均2年、経営学を主専攻とする学部1年生である。

日本語習得レベルとしては、日本語能力試験1級合格、2級合格程度である。日本語能力試験1級の場合、語彙数10,000語、漢字2,000字、学習時間900時間以上が求められている。これは新聞が読めるレベルであり、漢字の数だけで見ると、日本人の中学校卒業レベル（常用漢字1,945字）にほぼ相当する。

来日する留学生の数は、独立法人日本学生支援機構の2005年度（2005年5月1日現在）留学生受け入れ概況報告によると、留学生121,812人のうち80,592人（66.1%）が中国からの留学生で、そのほとんどが私費留学生である。加えて留学生の出身国をみると中国が第1位で、前年度よりも2,879人（3.7%）の増加となっている。本学の場合もその例にもれず、2005年5月1日現在、留学生175人（28ヶ国）のうち、103人（59%）が中国からの留学生で、うち87人（84.5%）が私費留学生である。また、筆者（新垣）の所属学部に在籍する留学生は68人で、その内訳は学部留学生45人（国費1）、大学院博士前期課程17人（国費1）、大学院博士後期課程1人、研究生5人（国費1）であり、およそ95.5%が私費留学生である（学内資料による）。

これらの学部留学生の留学の目的は、第1に日本語を習得したのち帰国し、外資系の企業に勤めたい。第2に日本企業に就職したい、というような順になっている。帰国後のことや就職のことを考え、学士の取得のみにとどまらず、修士、博士の取得を目指す者も多い。

1.2.1 試験の内容

留学生が大学に入学するまでには、「日本語能力試験」「日本留学試験」というものを受験する必要がある。先にも記したように「日本語能力試験」は文語表現（書き言葉）を重視していたのに対し、「日本留学試験」では、主にキャンパス内で使用頻度の高い話し言葉を重視する点が、両試験の大きく異なる点である。本稿では「日本語能力試験」に焦点を絞り、その中でも留学生がもっとも苦手意識を持って

いる有声音と無声音の違い、特殊拍といったものについて述べたい。

留学生は、「日本語能力試験」の1級を受験し、合格するレベルに達していることが一応の大学入学の基準となっている。「日本語能力試験」1級は、大きく「文字・語彙」(45点・100分)、「聴解」(45点・100分)、「読解・文法」(200点・90分)というように分かれる。その内容をまとめると(資料1)に示したとおりになる。これは2000,2001年度の実際の試験を、およそ10分の1の量に縮約した形である。時間にすれば、約4分で以下の問題を解答する計算になる。

テストの結果は、(資料1)問題Iの(2)「自己」というような語彙の読み方で正答率が低い。それはこの語彙が有声音と無声音の組み合わせになっているからであると考えられる。留学生は「じご・じこ・しご・しこ」といった選択肢で混乱する。これに加えて「じっこ・じこう(じこー)・じこん」のような特殊拍を織り交ぜた選択肢にも正答率が低くなる傾向が見受けられた。本試験では「1じき・2じぎ・3じこ・4じご」といった選択肢が用意されているが、むしろ日頃の学部留学生の発音訓練には、難易度を高くした「じご・じこ・しご・しこ・じっこ・じこう(じこー)・じこん」といった選択肢を用意することが必要なのではないかと考える。

(資料1) 『2000,2001年度 日本語能力試験試験問題と正解1級・文字と語彙』を基に筆者編集

問題I	次の文の下線をつけた言葉は、どのように読みますか。その読み方をそれぞれの1・2・3・4から一つ選びなさい。			
問	全力を <u>尽くして</u> <u>自己</u> の記録に <u>挑む</u> ことに <u>意義</u> がある。			
	(1)	(2)	(3)	(4)
(1)尽くして	1 かくして	2 たくして	3 つくして	4 なくして
(2)自己	1 じき	2 じぎ	3 じこ	4 じご
(3)挑む	1 いどむ	2 つかむ	3 はげむ	4 はばむ
問題II	次の文の下線をつけた言葉は、ひらがなでどう書きますか。同じひらがなで書く言葉を、1・2・3・4から一つ選びなさい。			
(1)学生のと きも っ と 勉強 して お け ば よ っ た と <u>後悔</u> している。				
	1 古米	2 国会	3 誤解	4 航海
問題III	次の文の下線をつけた言葉は、どのような漢字を書きますか。その漢字をそれぞれの1・2・3・4から一つ選びなさい。			

問題1 私は、ていこうしてあばれる犯人を押さえ込んだゆうかんな父をほこりに思う。

	(1)	(2)	(3)	(4)
(1)ていこう	1 抵抗	2 抵攻	3 邸抗	4 邸巧
(2)あばれる	1 妨れる	2 荒れる	3 暴れる	4 奮れる
(3)ゆうかん	1 勇肝な	2 勇敢な	3 雄肝な	4 雄敢な
(4)ほこり	1 賞り	2 誉り	3 誇り	4 褒り

問題IV 次の文の下線をつけた言葉の二重線 () の部分は、どのような漢字を書きますか。同じ漢字を使うものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。

(1)彼がピアノのコンクールで優勝するとかくしんしている。

- 1 今年の冬はひかくてき過ぎやすい。
- 2 明日の会議に何人出るか、もう一度かくにんしよう。
- 3 よく準備した結果、試験にごうかくした。
- 4 次回のオリンピックでメダルかくとくを目指している。

1.2.2 読解能力と発音能力

(資料2)

『2000年度 日本語能力試験試験問題と正解1級・読解』を基に筆者編集

問題I 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。答えは、1・2・3・4から最も適当なものを一つ選びなさい。

100年ほど前にあたる1900年のとき、地球上の人口はおよそ16億人であった。それが現在、55億人になっている。

私たちが金魚鉢の金魚だと思えばよい。3匹の金魚が突然3.5倍の11匹に増えれば水が濁るように、3.5倍も人口が増えれば環境に何らかの悪い影響が出るのは当然であろう。この人口のまま止まればまだよいのだが、(中略)たいへんない勢いでまだ増え続けている。1991年での世界人口の増加率は1.7%と推定されているが、それで計算すると、人口は40年間で倍増することになる。この増大傾向の修正のためには、地球上の私たち全員のライフスタイルの見直しが急務である。それにはどのような課題があるのだろうか。(中略)

1つは私たち全員の価値観の問題である。伝統的価値観として「子沢山」が望ましいとみなす民族は世界でも少なくない。私たちの民族もそうである。子沢山の祝福する気持ちが私たちの国では現在でもあり、にぎやかな家庭の幸福像を描きがちである。1989年に、1人の女性が一生の間に平均して何人の子供

を生むかという合計特殊出生率が1.57になったとき、1.57ショックといって大騒ぎになった。その騒ぎも、この価値観と関連している。そのときに、子供が1人ではかわいそうだ、日本の将来の労働力の減少をどうするのか、というような指摘があった。自民族の人口の減少に対する警戒心はたいへん強いのである。もちろん、ここでは国や民族レベルでの議論をしているのであって、個別の家族の子沢山の是非を論じているのではない。

2つ目の問題は社会システムの問題である。とくに貧困と差別について考える必要がある。国の経済力不足などで国の社会保障が十分でないと、老後などを心配して国民はある人数の子供をつくらうとする。また、貧しい家族は子供に家族の労働力を期待して子沢山になる傾向が見られる。

さまざまな差別が人口に関わるライフスタイルに影響を与えるが、とくに男女差別は直接的な影響を与える。環境と開発に関する世界委員会がまとめた『地球の未来を守るために』(Our Common Future)は女性の地位の向上が子供数の減少につながると指摘したが、これは大切な指摘であろう。女性の地位が向上すれば、家族内での子供を産むかどうかということについて女性の発言権が増大し、そのような社会においては子供の数が減少する。また、女性の雇用機会が十分に与えられている社会では、婚姻年齢が上昇し、そのことが子供の減少につながっているという。

(鳥越皓之編『環境とライフスタイル』有斐閣アルマによる)

以上は、2000年度「日本語能力試験」の読解問題の一部であるが、この文章をおよそ10分で読解する力が学部留学生には必要である。決して容易な文章ではなく、筆者らが本稿で試みるような経営学の専門用語を学習する必要もないくらいのレベルに到達しているように一見みえる。しかし、実際には特に漢字圏の留学生にとって読解は、比較的高得点に結びつきやすい試験項目である。読解、文章作成が一定のレベルに達している場合、大学の講義を受講し、単位を取得できる能力を有しているものと判断してしまいがちであるが、発音すること、つまり有声音と無声音の区別ができることと前述の能力とは分けて考えた方がよい。

1.3.1 有声音と無声音習得の方法と成果

留学生の母語が中国語である場合、その多くが「文字・語彙」の項目を苦手とする者が多い。それは中国語と日本語との有声音と無声音の対立の構造が異なること

に起因していると考えられる。その詳細は別の機会に譲る。

ここでは「日本語能力試験1級」の「文字・語彙」に焦点をあて、その学習方法と学習成果について述べていく。

調査対象者は、2005年度本学経営学部入学の留学生で、9人の中国語母語話者、1人のポルトガル語母語話者（ブラジル出身）、1人のスペイン語母語話者（ペルー出身）である。日本語の学習期間は平均2年、経営学を主専攻とする学部1年生である。

1.3.2 学部教育における留学生の概況

現在、大学における学部留学生の多くは私費留学生である。そして大学における講義を聴いて理解し、かつ単位を取得できる能力を有することが受験資格となっているし、また大学側でもそれを入学の基準としている。以上が学部留学生に必要な日本語能力であるが、実際問題として、留学生が入学した後、直面する問題としては、単位の修得率の悪さというものがあげられる。例えば、本学部では43単位までの取得が1年生で可能となる。しかし、留学生の場合平均38、40ということが多く見られる。それから上級生になると、演習では口頭発表が課せられる。その場合には、いわゆる発音面の悪さということが問題点としてあげられる。本稿では学部留学生の発音がどのようなものなのか具体的なテストでの誤読例を示しながら、分類し考察していきたい。

日本語は、基本的には子音（Consonant）と母音（Vowel）の組み合わせにより構成されるCV構造である。例えば「花」（hana）という子音と母音の組み合わせである。この基本構造に加えて特殊拍というものがある（Q、C_N、V構造といったものである）。例えば「各国」（かっこく）と「過酷」（かこく）といった区別は、日本語において撥音（Q構造）が意味の弁別に役立つ音素であるためである。それから「盛ん」（さかん）と「参観」（さんかん）といった促音（C_N構造）も意味の弁別に役立つ音素であるし、「お婆さん」（おばーさん）と「叔母さん」（おばさん）といった長音（V構造）もその一つである。以上、日本語の共通語の中にはQ、C_N、Vといった3種類の特殊拍があり、これらはいずれも留学生が習得しにくい音素であるといえる。

これらに加えて、発音習得を困難にしている一翼を担うのが、有声音と無声音との弁別である。例えば「原理」（げんり）と「権利」（けんり）といった区別である。これらの区別は、特に中国語、韓国語を母語とする留学生にとっては母語の干渉を

受け、その区別の習得が難しい。発音の面では、これを習得することができれば、日本語を制したといっても過言でないほどに重要課題であるといえる。

本学の学部留学生は、1年生のうちに4科目8単位の日本語を履修することが多い。場合によっては英語や他の言語を履修することもあるが、基本的には日本語を履修することになっている。1年生で履修を終えると、上級日本語の科目が設定されていない現況では、その他に日本語を学習する機会はほとんどない状況にあるといえる。2年生になると、ゼミという形式で各論を学ぶことになる。その折に、レジュメを作成し、ゼミにおいて、いわゆる演習形式で口頭発表を行なわなければならない。その折に留学生のいわゆる「発音の悪さ」というものが指摘される。例えば「組織」を「そうしき」と発音すれば、日本語を母語とする者には不快に感ずるであろう。やはり「葬式」と聞き取れるし、どんなに発表内容が良かったとしても、円滑なコミュニケーションを取れているかといった視点からすれば、円滑ではないといわざるを得ない。

このような、いわゆる「発音の悪さ」というものをどれくらい緩和していけるか、1年生の前期は比較的緩やかに学習を進めていくべきかどうか、非常に悩ましいところではあるが、1年生のうちに日本語の履修を済ませておかなければならないという現状では、やはり集中的に発音の問題に対処する必要性を痛感した。そこで、今年2005年度は、経営学をご専門となさる諸先生がたに基本文献のご紹介をいただき、小松章著『基礎コース経営学』をテキストとし、その中の専門用語あるいは一般的な日常用語であってもできる限り設問として取り上げ、単語、複合語の形で作問し、1回50題のテストを作成しテストした。その結果、コミュニケーションが取れない、もしくはとりにくい学生ほど、読み方の間違いが多いことがわかってきた。その点を克服するために、採点后、返却する際には、まず、解答を学生に板書してもらい、その間違いや、補足を教師が補う形をとり、その後で音読の練習を行った。これは、視覚的に文字を追いながら、有声音と無声音の発音の違いがあることを認識し、実際の発話に注意することを目的としている。

1.4 到達目標

1.4.1 講義内における到達目標

学部留学生に必要な日本語のレベルは、基本的に日本語能力試験1級合格程度あるいは日本留学試験により選抜されたもので、大学で行われる一般的な日本語で行われる講義に問題なく参加できることが前提となる。留学生の多くは、これまでの

日本語の授業とは異なり、専門的な分野を学べるということに、非常に興味を持っている。しかしながら、講義内での耳慣れない専門用語の聴き取りに苦戦している現状がうかがえる。そこで、本講義では『基礎コース経営学』（小松章著）を用いながら、その用語についてテストを作成し実施した。テスト結果は分析し、学部留学生が実際の講義でどの程度、内容を理解できているのかという点について考察した。1年間の講義終了時には（資料3）の文章が途切れることなく、音読できることを目標として設定した。

（資料3）

『基礎コース経営学』（小松章）を基に筆者作成

株式公開 人の一生と同じように会社にも「一生」をあてはめた場合、株式会社にとって、成人式にあたるものは、株式の公開である。株式会社は、もともと発起人以外の多数の人々から出資資本を調達できるメカニズムを内包した企業形態であるが、その機能は、まさに株式を市場に公開してこそ完全に発揮されるのである。いってみれば、株式会社は、株式公開によって制約的に一人前となるのである。株式の公開により、特にそれが証券取引所への上場である場合には、資本調達の手段は、飛躍的に向上することになる。私たちの会社も、創業以来、経営者・従業員が一丸となって努力を重ねてきた結果、順調に業績を伸ばしてきた。

1.4.2 日本語能力試験1級における到達目標

学部留学生である以上、日頃の講義を受講し、単位を取得する能力を有する必要が求められる。そのためには上記に設定した目標に到達するくらいの日本語力が必要であると考えられる。これと平行して目標としたいのが「日本語能力試験1級」における合格点である70点に「文字・語彙」の項目で達することとした。

(資料4)

経営学に関する漢字学習（企業と経営） 5

201 企業論理	226 能力・成果主義
202 目的と手段の連鎖	227 新卒一括採用
203 非営利組織	228 キャリア重視
204 悪い仕事を淘汰する	229 外部委託
205 組織変革	230 常務取締役
206 職能別組織	231 作業管理職能
207 証券会社	232 具体的戦術
208 購買活動	233 財務的意思決定
209 損益分岐点	234 人事管理
210 生産性の向上	235 委譲する
211 固定費が増大する	236 地域別事業部制
212 費用の回収	237 外部環境
213 企業間信用	238 共通認識
214 納品業者	239 経営資源
215 財務活動と労務活動	240 比較的危険愛好者
216 資本を調達する	241 成熟期
217 労働力を確保する	242 企業組織の活動領域
218 人的資本	243 持株会社
219 未熟練労働	244 企業形態
220 研究開発	245 企業間の結びつき
221 企業収益の分配問題	246 事業部制
222 報酬制度	247 内部の人事組織
223 負の効用	248 財務諸表
224 満足感を得る	249 経営分析
225 年功序列	250 財務戦略

2. テスト内容と実施方法

『基礎コース経営学』（小松章著）をテキストに問題を作成しテストを実施した。テストは講義開始後のおよそ15分間である。2005年度における著者（新垣）の日本語担当コマ数は週に3回前後期で、実施回数はおよそ90回である（3回×15回×2期＝90回）。第5回目の講義で使用した漢字テストの概要は（資料4）のとおりである。

2.1 誤読別語彙の分類

留学生が誤読する場合にはいくつかのパターンがみられる。「Ⅰ有声音として誤読した語彙の例」「Ⅱ無声音として誤読した語彙の例」「Ⅲ特殊拍を挿入した誤読例」「Ⅳ特殊拍を脱落させた誤読例」「Ⅴ誤読」、そして「Ⅵ誤読しなかった語彙の例」となる。そのパターン別に分類し示せば[表1-1]から[表1-5]のようになる。ただし、「人事管理」「内部の人事組織」といった設問で、同じように「にんじ」と誤読していた場合には、「番号」に問題番号を併記し、「問題」「誤読語」「誤読例」をここではまとめて記した。

[表1-1] Ⅰ.有声音として誤読した語彙の例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	207	損益分岐点	分岐点	ぶんぎてん
2	240	比較的危険愛好者	危険	きげん
3	221	企業収益の分配問題	分配	ぶんばい
4	232	具体的戦術	具体的	ぐだい

[表1-2] Ⅱ.無声音として誤読した語彙の例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	207・243	証券会社	会社	かいしゃ
2	221	企業収益の分配問題	分配	ふんはい
3	211	固定費が増大する	増大	ぞうたい
4	202	目的と手段の連鎖	手段	しゅうたん

[表1-3] Ⅲ.特殊拍を挿入した誤読例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	248	財務諸表	諸表	しょうひょう
2	217	労働力を確保する	確保	かくほう
3	225	年功序列	序列	じょうれつ
4	242	企業組織の活動領域	組織	そうしき
5	209	損益分岐点	損益	そうえき
6	202	目的と手段の連鎖	手段	しゅうたん

[表1-4] IV.特殊拍を脱落させた誤読例

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	222	報酬制度	報酬	ほしゅう ほしゅ
2	212	費用の回収	回収	かいしゅ
3	221	企業収益の分配問題	収益	しゅえき

[表1-5] V.誤読

通番	番号	問題	誤読語	誤読例
1	219	未熟練労働	未熟練	みじゅうれん みじゅねん
2	225	年功序列	年功	れんこう
3	227	新卒一括採用	新卒	しんそく
4	231	作業管理能力	作業	さくぎょう
5	234・247	人事管理	人事	にんじ
6	241	成熟期	成熟期	せいじゅうき せいじゅっき
7	202	目的と手段の連鎖	連鎖	れんさく
8	209	損益分岐点	分岐点	ぶんしてん
9	214	納品業者	納品	なっぴん なひん
10	218	人的資本	人的	ひとてき
11	223	負の効用	負	まげ
12	229	外部委託	委託	いとく
13	230	常務取締役	取締役	とりひきやく
14	238	共通認識	認識	にんし
15	240	比較的危険愛好者	比較的	ひこうてき
16	244	企業形態	形態	せいたい
17	249	経営分析	分析	ふんしつ

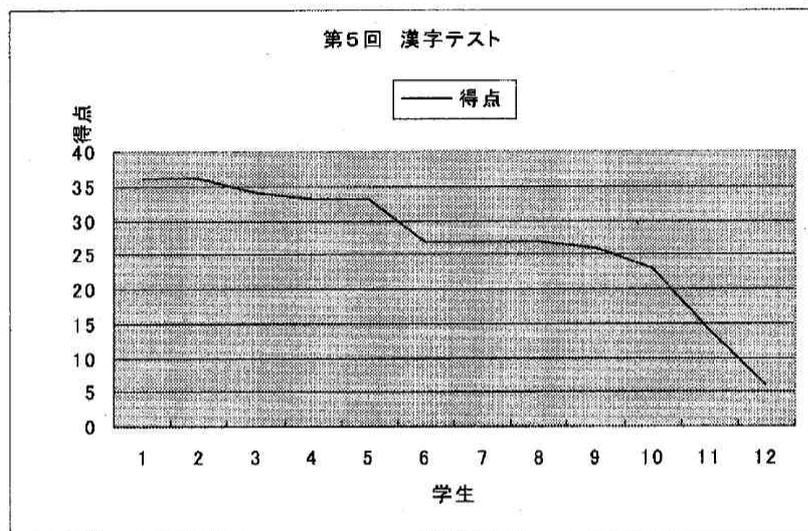
VI.誤読しなかった語彙の例

次にあげる例は誤読がなかった例である。「購買活動(208)」「企業間信用(213)」これは、留学生が誤読しなかった語彙項目である。語彙の後の()内の数字は、テストの番号である。また「常務取締役(230)」の設問は上位2人を除いた全学生が誤答した。誤答として多かった答えが「じょうむとりしめやく」であった。このような和語については、留学生が読めないことが多いので強化訓練対象語彙であるといえる。

2.2 「日本語能力試験1級」取得者とテストとの関連

上記の語彙テストを採点后、返却する際には、まず解答を学生に板書してもらい、その間違いや、補足を教師が補う形をとり、その後で音読の練習を行った。テストは各2回ずつ、一定期間を置いて実施した。その得点結果の変動については新垣(2006)を参照されたい。

[グラフ1]



[表2]

学生	得点
1	36
2	36
3	34
4	33
5	33
6	27
7	27
8	26
9	23
10	14
11	6

上記に示した結果は、第5回目に実施した漢字テストの結果である。2005年度の「日本語能力試験」で1級に合格した1人を含めた計6人が既に合格した者で、上位を占めている。この一回の試験をもって、合格者と上位者との関係を意味づけることはできないが、現在、筆者らが各成績を整理した段階では、上記のような結果となっている。

2.3 今後の課題

今年度は、学年末に実施される「日本語能力試験1級」の合格に向けて、「文字・語彙」を中心に学習を進めてきた。その進め方としては、「日本語能力試験1級」の過去問題に固執することなく、日頃の専門科目の講義内において必要となるであろう専門書の語彙を中心に漢字テストを実施し、「文字・語彙」の強化に努めた。しかしながら、6人が受験し、合格者は1人に留まるという結果であった。このことを踏まえ、来年度は、専門書より選定した漢字以外に加え、「日本語能力試験1級」の過去問題からも漢字テストを作成する必要性を痛感した。

2005年度に不合格になった学生の「文字・語彙」の得点について調査したところ、

いずれも50点台であることがわかった。1級においては、おおよそ70パーセントが合格ラインとされるので、残りの10点あまりの得点を今後どのように伸ばしていけるかが課題である。

また、漢字テストの得点と「日本語能力試験1級」合格者との関係性について観察する場合、漢字テストの学習効果を明確にするためにも学習を開始する段階のブレースメント・テストの導入についても考える必要がある。

おわりに

本稿では、経営学における語彙を基に、留学生が誤読する日本語の漢字の読み方について考察した。有声音・無声音の区別の習得、特殊拍を含む語の習得は中国語を母語とする留学生にとってはかなり困難な課題であるといえる。視覚によって留学生の発音の間違ひを見て取ることができるという観点から、前出「日本語能力試験」(資料1)の問題パターンは有効であると考えられる。出題パターンとしてはこれに従い、『基礎コース経営学』にみられる語彙、センテンスを基に例1のような問題を作成した。

例1

『日本語能力試験試験問題と正解1級・文字と語彙』を基に筆者作成

問題I 次の文の下線をつけた言葉は、どのように読みますか。その読み方をそれぞれの1・2・3・4から一つ選びなさい。

問1 大量生産大量消費によって、価格破壊が起きている。

(1)

(2)

(1)大量 1 たいりょう 2 だいらょう 3 たりょう 4 だいらよ

(2)価格 1 かがく 2 かかく 3 ががく 4 がかく

問2 職場での人間関係を友好に保つには、個人の主義主張を許容することが大切である。

(1)

(2)

(1)職場 1 しょくばん 2 しょくば 3 しょくぱ 4 しょくばん

(2)主義 1 しゅぎ 2 しゅうぎ 3 しゅつぎ 4 しゅうぎ

問3 生産性を高めるためには、作業の分業や協業が必要である。

(1)

(2)

(1)作業	1	さぎよ	2	さぎょう	3	さくぎょう	4	さくぎよ
(2)協業	1	きょうぎょう	2	きよぎょう	3	きょうきよ	4	ぎょうぎよ

このような視覚を通して学習する試験の形態は、成人してから外国に留学することの多い、留学生にとっては有効な学習方法であると考えられる。これまでは、留学生の基礎教育ないし学部入学以前の教育にその力を傾注しなければならなかったが、ある程度入学以前の教育の質が安定してきた現在の状況、そして留学生の日本語能力が年々向上している状況をも、留学生教育は次の段階へと進むべきであるとする。具体的には、各学部における概論書をテキストとした漢字の読み方を問うテストを作成し、解答してもらい、そして答えあわせを行い、発音訓練をする。視覚と発音することを合わせた発音訓練の繰り返しが、いずれ必要となる口頭発表の際の適切な発音修得に成果があるものとする。

今年度は、講義の仕上げとして（資料5）に示した『基礎コース経営学』の一部を学習者たちに音読してもらった。以下の量とレベルの文章であれば、日本語を母語とする者に対して不快を与えないような音読ができるようになってきた。

（資料5）

『基礎コース経営学』p.80より引用

株式公開は、設立時以来、発起人と募集に応じた少数の範囲の株主とからなる創業株主によって限定的に所有されてきた株式会社が、所有権を開放し、会社から多数の株主を受け入れることによって、まさに株式会社本来の形態に脱皮する行為にほかならない。つまり、株式会社は、株式公開によって初めて十全な意味での株式会社になりうるのであり、逆にいえば、株式を未公開の株式会社は、たんに法形式上、株式会社として存立しているというにすぎず、経済上は、株式会社としては未完成であるといわなければならない。

株式公開は、通常、「増資（資本金の増額）」に合わせて、その増資新株を証券市場を通じて広く売り出すことにより、実現する。証券市場では、誰もが自由に買い手として参加できるから、株式公開は、不特定多数の投資家を株主として受け入れることになる。ちなみに、同族色の濃い企業の中には、株式公開を嫌う傾向がみられるが、その理由はまさにこの点にある。不特定多数の投資家を、自分たちの「身内」とみるか、それとも得体の知れない「よそ者」とみるかの違いが、株式公開に踏み切るか否かの分かれ目になっているといつてよいだろう。

本研究の資料は、例1で示したような問題を作問する場合の基礎資料として利用していきたい。今後もこのような基礎資料を整え、学部留学生のための発音習得手助けとなれば幸いである。また既述の通り、この発音訓練ならびにその習得は大学における講義の時の聴き取りはもとより、口頭発表をする場合においても有効な方法であると考えられる。

専門教育に関連する日本語訓練のための問題集が少ない状況で、学部留学生が単位取得に向けて学習する環境を早急に整える必要性を痛感していた。2005年度は日本語のクラスで実施したテストを分析しながら、より高い学習成果を目指した問題作成に取り組んだ。2006年度はこれに加筆修正を加えながら、よりコンパクトで整理された問題集作成に取り組んでいきたい。

参考文献

- 新垣公弥子 (2006) 「経営学を学ぶ留学生のための発音訓練—発音訓練問題作成までのプロセス—」『国際経営論集 第31号』神奈川大学経営学部
- 嵐 洋子 (2003) 「幼児の特殊拍意識の発達に関する一考察」『音声研究 234号』日本音声学会
- 岩崎典子 (2002) 「日本語能力簡易試験 (SPOT) の得点とACTFL口頭能力測定 (OPI) のレベルの関係について」『日本語教育 114号』日本語教育学会編
- 岩田 礼 (2001) 「中国語の声調とアクセント」『音声研究 226号』日本音声学会
- 丘 益巳 (2002) 「日本経済語彙における日中両語でのずれについて」『日本語教育 113号』日本語教育学会編
- 奥村訓代 (2005) 「大学の学部における日本語教育の使命と役割」『日本語教育 126号』日本語教育学会編
- 大城朋子 (2005) 「日本語学習者のための沖縄地域共通語—地域に根ざした教材作成のための基本語彙に関するパイロット調査—」『日本語教育 108号』日本語教育学会編
- 川越いつえ他 (2002) 「借用語における促音」『音声研究 229号』日本音声学会
- 小松 章 (2003年初版・2004第3刷) 『基礎コース 経営学』新世社
- ジェトロ情報企画課出版班 『BJTビジネス日本語能力テスト公式ガイド—概要と模

擬テスト』

- 庄司恵雄 (2004) 「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」『日本語教育 122号』日本語教育学会編
- 新試験研究グループ著 (2002) 『日本留学試験標準問題集改訂新版』ユニコム
- 戸田貴子 (2003) 「外国人学習者の日本語特殊拍の習得」『音声研究 233号』日本音声学会
- 日本語教育学会編 (2000) 『日本語教育辞典』大修館書店
- 日本国際教育協会 (2001) 『平成12年度 日本語能力試験試験問題と正解1・2級』国際交流基金
- 日本国際教育協会 (2002) 『平成13年度 日本語能力試験試験問題と正解1・2級』国際交流基金
- 日本国際教育協会 (2005) 『平成16年度 日本語能力試験試験問題と正解1・2級』国際交流基金
- 張 麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク
- 陳 生保 (1996) 「中国語の中の日本語」『日本文化フォーラム』国際日本研究センター
- 彭 飛 (1998) 「日本語と中国語の対照研究が抱える諸問題をめぐって (1)」『無差』京都外国語大学日本語学科
- 彭 飛 (2003) 『日本語の特徴』凡人社
- モイラ・イップ (2002) 「広東語の借用語音韻論：音声知覚と音韻構造」『音声研究 229号』日本音声学会
- 森田良行 (1987) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 劉 秋燕 (2002) 「日本語母語話者と台湾の日本語学習者における閉鎖音/d/と弾き音/r/の知覚」『音声研究231号』日本音声学会

参考資料

http://www.jasso.go.jp/kikaku_chosa/ryugaku_chosa/16004.pdf 日本留学生支援機構
留学生受入れの概況 (2005年版) (アクセス日2006.4.5)

謝辞

本稿執筆にあたっては、沖縄国際大学での日本語能力試験における試みが大きな契機となった。その機会を与えてくださった大城朋子先生（沖縄国際大学・日本語教育学）に、まず深謝申し上げたい。そして学部留学生の専門教育を支援する上で、専門書の選定が非常に重要な役割を占めることは言うまでもない。専門書の選定に際しては小島大徳先生（神奈川大学・経営学）にお世話になった。記して深謝申し上げたい。

また本稿でまとめた問題作成に関しては、本学の留学生ならびに日本語教師を目指すみなさんに多くの意見をいただいた。以下に記してお礼申し上げる。

金山月さん、高燕霞さん、魏鳳平さん、諸子華さん、石梅さん、蘇栄さん、楊柏明さん、劉衍智さん、門松文郎さん、陳雅玲さん、陳斌さん、レナート・カルデナスさん、ロジェリオ・タカキさん、小池明子さん、田原裕貴さん、佐藤翔大さん、山崎優美子さん（順不同）